

## 平成28年度 若草幼稚園自己評価

若草幼稚園の平成28年度における自己評価は以下のとおりである。

### 1 保育の計画性

園文化としてルーティンに流れていく部分と計画をもって臨む部分を保育者自身が明確にし、創り上げていく時期にきている。園長のトップダウンを抜けて、自分たちで保育を創り上げていく率をあげていくことが、課題である。

2017年度は、特に、作品展のテーマに草花を選んだことで、計画が翻弄される年となった。年長児の描画として計画していたひまわりの咲いた時期が描画を行うタイミングと合わず、秋咲きのひまわりもまた、合わなかった。そこから、同じ構造をもつコスモスの描画へと落ち着いたが、自然を相手にすることの「うまくいかない」豊かさを経験できたことは、保育を営むうえで、大きな学びだった。

### 2 保育の在り方、幼児への対応

子どもの入園前の生活歴における経験不足が特に目立った年だった。今後、この傾向は強まっていくことが予想される。より、個別対応の率をあげ、特別支援の方法を園の保育に取り入れていく必要性を感じた一年だった。また、それぞれの保育者が、自分の保育を振り返り、その課題が明確になった年でもあった。

基本的な生活習慣に関する意識の向上を、保護者に対して投げかけていく必要がある。さらに、就学前の子育て支援を行っている「めばえ教室」において、さまざまな体験の機会を提供し、そのことの意味を保護者に伝えていく必要がある。

### 3 教師としての資質や能力・良識・適性

保育実践において、保育者の感性や直観は大切である。しかしそれが無自覚で行われる場合は、専門的であるとは言えない。特に、自分の保育を振り返り、優先順位をたて、その優先順位に対する根拠をもち、次の実践につなげていく丁寧な保育の大切さが問われた年であった。その意味で、(弾力的かつ柔軟であることを前提とした)指導計画を、それぞれがきちんと立てる能力の必要性を問われた年でもあった。

### 4 地域の自然や社会とのかかわり

保幼少連携を通して、就学に大きな安心を得た子どもがいたことが成果である。小学生の工夫が前年度よりも高まっており、続けていくことの大切さを思った。今後、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの連続性について、考えていくことができればよいと考える。

すくすくの森の整備では、プロの手をかりて、より里山保全と教育環境の両立を押し進めることができた。

地域連携協議会の役員や、地域の防災、人権イベントに協力していくことを通して、地域に根づいた活動を進めることができた。すくすくの森の整備を通して、森の遊び環境を高め、その様子を子どもに伝えることができた。

## 5 研修と研究

研究内容と保育実践がよいかたちでつながり、研究が、ダイレクトに実践の向上につながった点がよかった。